

gram を併用し、より正確に診断できたので報告する。

前処置に Lugol を投与し、 ^{131}I -Rose Bengal を静注し、20分、5、24、48時間後に、さらに1週間後に scintigram をとる。

症例総数33例、うち scintigram 施行9例ですべて手術または剖検で確認する。

肝炎の scintigram は、20分後、 ^{131}I -Rose Bengal は、肝臓に集まり、心臓部、その他の腹部も薄くみられ、5時間後では、肝臓にまだ残り、胆嚢がみられることあり、そして腸管内の排泄がある。それらは24、48時間後で明瞭となる。

先天性胆道閉鎖症では、20分後は肝炎と同様であるが、5時間後で肝臓の濃度は増し、腸管内の排泄はなく、腎臓が scanning され、それらは、24、48時間後のもので明瞭となる。また1週間後でも scanning できる。

すなわち、 ^{131}I -Rose Bengal で scintigram をとると腸管内排泄の有無がわかり、先天性胆道閉鎖症で腎臓が scanning される。

先天性胆道閉鎖症と乳児肝炎は、治療上早期鑑別が必要であり、単なる肝機能検査、尿、便所見、かつ肝生検からも両者の鑑別することは困難なことが多いが、 ^{131}I -Rose Bengal を用い、放射能の時間的変動、および scintigram をとると乳児黄疸の鑑別診断が容易にかつ確実な方法と考えられ報告する。

*

76. 肝癌における ^{198}Au -Colloid 肝摂取率 (K_L 値) の検討

岡谷繁廣 富永 輝 梶田明義 前田知穂
橋本 勇 吉田祥二 中尾宣夫
(神戸大学放射線科)

目的：昭和39年4月より、同42年5月までの約3年間、本教室において肝スキャンニングを行なったもので肝癌と診断した50例の内、手術および剖検によって原発性あるいは転移性肝癌と確診した26例について、腫瘍の浸潤部位と ^{198}Au -Colloid 肝摂取率; K_L との関係について検討し、併せて値の算出にさいし若干の考察を加えた。

方法および対象：2"φ × 2"NaI 結晶および flatt field collimator を仰臥位にした患者の肝上 10cm に固定し、 ^{198}Au -colloid 50μCi を静注して、その肝摂取率曲線をとった。

対象は原発性肝癌11例、転移性肝癌15例である。

結果：原発性肝癌11例を肝硬変合併および肝門浸潤の

有無で分類すると8例が肝硬変を伴ない、その内肝門浸潤のあるものが5例でそれらの K_L 値は平均0.11、また、肝門浸潤を伴なわない3例の K_L は平均0.12で、前者と差異を認められない。転移性肝癌の15例においては、肝門浸潤のある6例の K_L 平均値は0.12で、肝門浸潤のない症例の K_L 平均値0.16と比べ明かに低い傾向がみられる。

考按：原発性肝癌の場合、そのほとんどが肝硬変を伴っているもので、 K_L は主として肝硬変の値を意味すると思われるべきである。しかし肝転移例で肝門浸潤のあるものは、ないものに比して低い値をとり、肝内に異常所見のない例では正常値を示すものが多い。肝硬変を伴なう原発肝癌例や、肝門浸潤を伴なう肝転移例の肝摂取率曲線では、著しい $t_{1/2}$ の延長がみられ、 $t_{1/2}$ に対応する K_L の読みが相対的に粗となる。これは、 $K_L = \frac{0.693}{t_{1/2}}$ の双曲線において、肝硬変群は、正常群より右に位置するため、 $t_{1/2}$ の2点の差に比べ、これに対する K_L の差が小さくなるためである。これは、肝循環動態を比較する上で考慮すべきことであり、 $t_{1/2}$ で表わすほうが病態の理解にはより適当であると考えられる。

結語：①原発性肝癌 K_L の値は合併する肝硬変症の K_L 値を示す。②転移性肝癌は K_L 値は、肝門浸潤の有無で影響される。③肝循環障害の著しい肝癌例では $t_{1/2}$ で比較検討するべきである。

*

77. 肝疾患の肝シンチグラム上の脾像出現に関する実験的検索

渡辺幹雄<中央検査部>
藤井正博<中央 RI 部>

越智和夫 杉本 博 富江一夫
三好秋馬 脇坂行一<脇坂内科>
(京都大学)

^{198}Au -colloid あるいは ^{99m}Tc -colloid により肝シンチグラムに肝変形像とともに脾像が出現することは肝硬変症例にもっともしばしば経験する特徴的所見として知られており、われわれの経験でもほとんどすべての肝硬変症例に認めている。それに対して慢性肝炎では脾像出現頻度は低下し、また出現例には末梢消失係数の著明な低下を伴うことが多い。かかる所見は脾像出現と肝疾患の進行度との間に何等かの関係があることを想像させるが、この点について若干の実験的検索結果を報告した。

方法：ラットを用い、慢性四鉛化炭素傷害群と Camp-